

イザヤ書 55 章 1-5、10-13 節

ローマの信徒への手紙 8 章 9-17 節

マタイによる福音書 13 章 1-9、18-23 節

先週の前半は猛暑、後半は少し過ごしやすい日々でしたが、皆さまくれぐれも熱中症、脱水症状にはお気を付けください。

さて、本日は福音書のお話を中心に学びます。本日の福音書は、新共同訳、聖書協会共同訳でも、『種を蒔く人』のたとえ」と題されています。また、マタイ、マルコ、ルカ、三つの福音書に書かれているのですが、内容がそれぞれ異なっています。

イエス様は、この『種を蒔く人』のたとえ」を、集まった「群衆」に向けて語りました。そこには「弟子」たちもいました。この点は三つの福音書で一致しています（マタイ 13：1～3、マルコ 4：1～2、ルカ 8：4）。そして、そのたとえが持つ意味を、イエス様自身が解釈するのですが、その点も一致しています（マタイ 13：18～23、マルコ 4：13～23、ルカ 8：11～15）。本日はことにマルコとマタイを比較しながら考えます。

「種」、「種を蒔く人」という言葉は両者とも同じです。また「道端」、「石だらけの土地」、「茨」、「良い地」という言葉も一致しています。マタイとマルコが大きく異なるのは、実を結ぶ種の順番です。マタイでは、「ほかの種は良い土地に落ち、実を結んで、あるものは百倍、あるものは六十倍、あるものは三十倍になった。耳のある者は聞きなさい。」（マタイ 13：8～9）となっています。つまり 100 から 30 です。マルコでは、『また、ほかの種は、良い土地に落ち、芽生え、育って実を結び、あるものは三十倍、あるものは六十倍、あるものは百倍になった。』』（マルコ 4：8）となっています。つまり 30 から 100 です。倍になる数が、逆になっているのです。また、小さい点として、最後の部分が、マルコでは「聞く耳」となっていますが、マタイでは単に「耳」となっています。

マルコの方を先に考えますと、まず一つの前提を考慮しておく必要があります。マルコは弟子たちを、イエス様の教えをあまり理解しない登場人物として描いている、ということです。ここでもそのことが現れています。「イエスが独りになられたとき、イエスの周りにいた人たちが、十二人と共に、たとえについて尋ねた。」（マルコ 4：10）とある通り、彼らは、弟子でありながらイエス様のたとえがわからなかったのが、教えてもらいに来るのです。そこでイエス様は、イザヤ書を引用した後、「このたとえが分からないのか。では、どうしてほかのたとえが理解できるだろうか。」（マルコ 4：13）と弟子たちを、軽く叱るのです。その後、イエス様がたとえの解釈を語る部分へとつながります。この時点で、マルコが「聞く耳」と表現していた意味が解ります。弟子たちの「耳」は、たとえを理解する「聞く耳」ではなかったのです。

マタイはマルコとは逆に、弟子たちを、イエス様のたとえを理解できる登場人物として描きます。それは、「なぜ、あの人たちにはたとえを用いてお話しにな

るのですか」(マタイ 13:10) と、自分たちとは区分して「あの人たち」と表現していることからわかります。そしてイエス様もその問いに対して、「あなたがたには天の国の秘義を知ることが許されているが、あの人たちには許されていないからである」(マタイ 13:11) と語り、イザヤ書の引用し、たとえの解釈へとつながります。また、16節には「しかし、あなたがたの目は見えているから幸いだ。あなたがたの耳は聞いているから幸いだ。」とイエス様が弟子たちを高く評価する言葉もあります。これらの違いが、種が実を結ぶ倍数の違いとその意味に関係しているのです。

このたとえは、『種を蒔く人』のたとえ」と題されていますが、そもそも主題は、種を蒔く人でも、種でもありません。蒔かれる土地です。大切なのは、自分がどのような土地であるか、また土地になるかということです。福音書を文学的に解釈する観点では、これらの土地の四つの分類は、そのまま登場人物たちの分類だとする解釈がありますが、わたしもそう思います。マルコにおいて弟子たちは、失敗する存在です。「道端」のような弟子たちもいましたし、「石だらけの土地」、「茨」の土地の弟子たちもいました。いないのは「良い地」の弟子たちです。イエス様に従った弟子たちは、イエス様の逮捕の際に、皆逃げてしまったので、誰も「良い地」になれなかったのです。だからこそ、もう一度、イエス様に従い、「良い地」になることを目指しなさい、たとえ失敗しても、もう一度、従うことを目指しなさい、30倍、60倍、そして100倍目指して歩みなさいと語られるのです。

しかし、マタイは異なります。四つの土地の分類は、登場人物たちの種類ともいえますが、弟子たちは模範的な存在です。ここでは「天の国(神の国)の秘密を悟る」ことが許されている人々です。それゆえ、目指すことは最初から完全です。100倍になると思い歩みなさいということです。タラントのたとえで、最も多い5タラントンから始まり、また褒められていることも同様の趣旨でしょう(マタイ 25:14-30)。これは、マタイ福音書に見られる神学の特徴です。マタイ福音書は、主なる神様が与えてくださった、律法の実践を重んじており、イエス様の愛に基づいて、ユダヤ人たちよりも自分たちが徹底して律法を実践し、律法を完成することを目指しているからです。もちろん、マタイは自分たちが完全だとは思っていません。主なる神様が与えてくださる恵が完全だということです。自分たちがどれほど達成したのか結果が明らかになるのは、終末の時であると考えています。しかし、主なる神様が与えてくださる恵は最初から100なのです。

さて、マタイとマルコを比較しましたが、イエス様が求める事柄は同じだと思います。それは教会とそこに集まる一人ひとりが「良い土地」になることです。それでは何を指して「よい」と呼ぶのか、「豊かな実」とは何か。この点に関しては、意見が分かれると思いますが、わたし自身は、教会が「善い土地」であるとは、主なる神様の招きによって、どのような人であっても、あらゆる線引きを超えて集まることのできる集いであることと考えます。この目標は、2000年経過した今も実現していません。その意味では、わたしたちは、マルコのたとえから学びより一層努力するのを感じつつ、マタイ的にとえから学び、神様からその完成を示されている存在として、つねに希望を持ちたいと思います。